

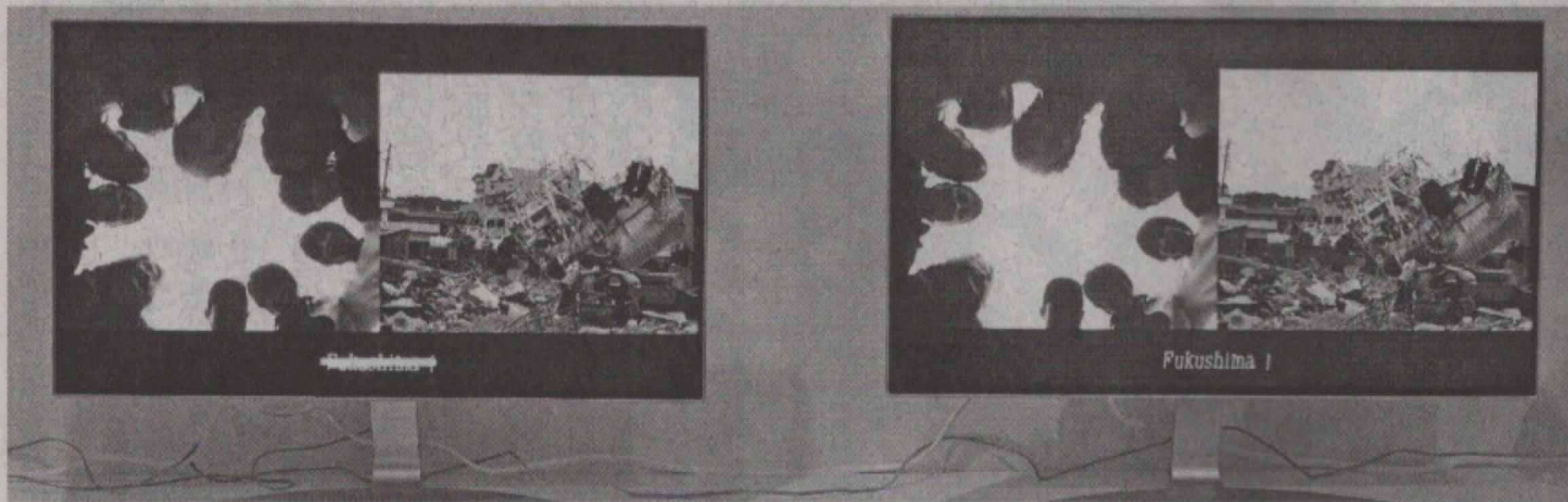
消された「福島最高！」

「復興頑張るぞ」「オー」彼女欲しい」「オー」。がれきの残る東日本大震災の被災地で、円陣を組んだ若者10人が、自らを鼓舞するように声を張り上げる。約5分の映像は、美術家集団「Chim↑Pom」(東京)による作品「気合い100連発」だ。岡山市南区浦安南町の住宅街にオープンした現代美術館「S-HOUSE ミュージアム」で公開されている。

広島市上空に軽飛行機で「ピカッ」の文字を描くなど、社会問題に過激ともいえる表現で体当たりしてきた同集団。東日本大震災には、東京電力福島第1原発周辺の帰還困難区域に作品を設置し、見ることでできない展覧会を昨年始めるなど、独特のスタンスで向き合っている。

「気合い100連発」は2011年5月、福島県相馬市で、がれきの片付けに励む若い被災者たちの叫びを世界に発信しようとする制作。海外の展覧会に出品するはずが、橋渡し役の国際交流基金(東京)の担当者から「放射能」「福島」などの言葉が好ましくないと指摘され断念し

東京の美術家集団「Chim↑Pom」 ■ 岡山で問題作公開



た。今回はあえて「問題ない」よう改変した修正版と初めて並べ

て展示。見比べると、修正版は時折「ピー」という音で言葉がかき消され、字幕に線が入る。「福島最高」「放射能に負けないよ」といった前向きな決意表明も機械的に消されるため、被災の事実を否定するような違和感が残る。

「消さないことまで自主規制する風潮に疑問を投げ掛けたかった」とメンバーの水野俊紀(36)、稲岡求(33)。花房香館長は「メンバーと被災者の絆が生んだ作品が、なぜ海外に出せなかったのか、考えてみてほしい」と話す。

同ミュージアムは、人気建築家ユニットSANA Aが初めて

Chim↑Pom「気合い100連発」(右)と「Fukushima」の字幕に線を入れた修正版

設計した木造個人住宅を改装。現代アート界の最先端を行くアーティスト7組の作品を年1回更新していく。

開館は土、日曜日と連続する祝日の午前10時〜午後5時。有料(投げ銭制)。問い合わせはメール(hanafusa-kaoru@midbiglobe.jp)。

(松山定道)

「工芸は圧倒的に日本人が得意な分野」と言い切るのは、金沢21世紀美術館、東京芸術大学美術館の館長を務める秋元雄史さん。総社市で開かれた現代アートの連続講座「鬼ノ城塾」に登壇し、新著「工芸未来派」(六耀社、20062円)で紹介した新しい現代工芸の魅力を語った。

香川県直島のベネッセアートサイト直島のチーフキュレーター、地中美術館長を経て、2007年に金沢21世紀美術館の館長に就任。伝統工芸が盛んな金沢で専門外だった分野に初めて触れ、「日本の美術は総じて工芸的といえる」ことに気付いたという。

「工芸未来派」刊行の秋元雄史

例えば、世界的に活躍する美術家村上隆は東京芸術大の日本画科出身で「画題はポップでも、作品のディテールは非常に職人的」と秋元さん。「現代アートは一般にコンセプトなどを頭で作るもの。でも日本人は技法、材料に重きを置き、手で作って

現代工芸 現の面

いる」その目見渡し捉映した、



文化短信

H氏賞に森本孝徳さん

第66回H氏賞(日本現代詩人会主

催)は、森本孝子回報(思潮)詩人賞は尾花仙(同)に決まった。81年生まれで、